

雲英文庫
文庫31
B 31
早稲田大学図書館





三十一





小正三六九十一

唐栢
印



新日よき恵

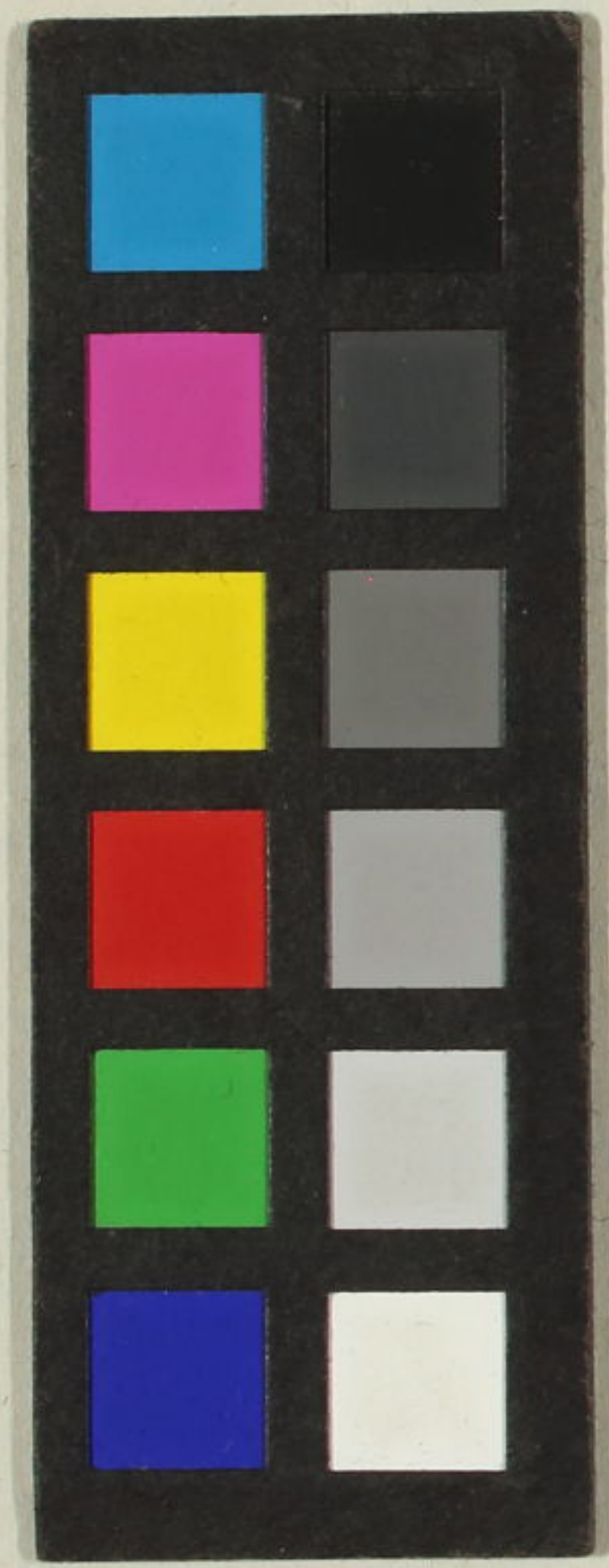
襦袢や函染の彩

若き時終るも

あねね初音

壬申新巻

隆風





六四三六九十一



新日よき恵

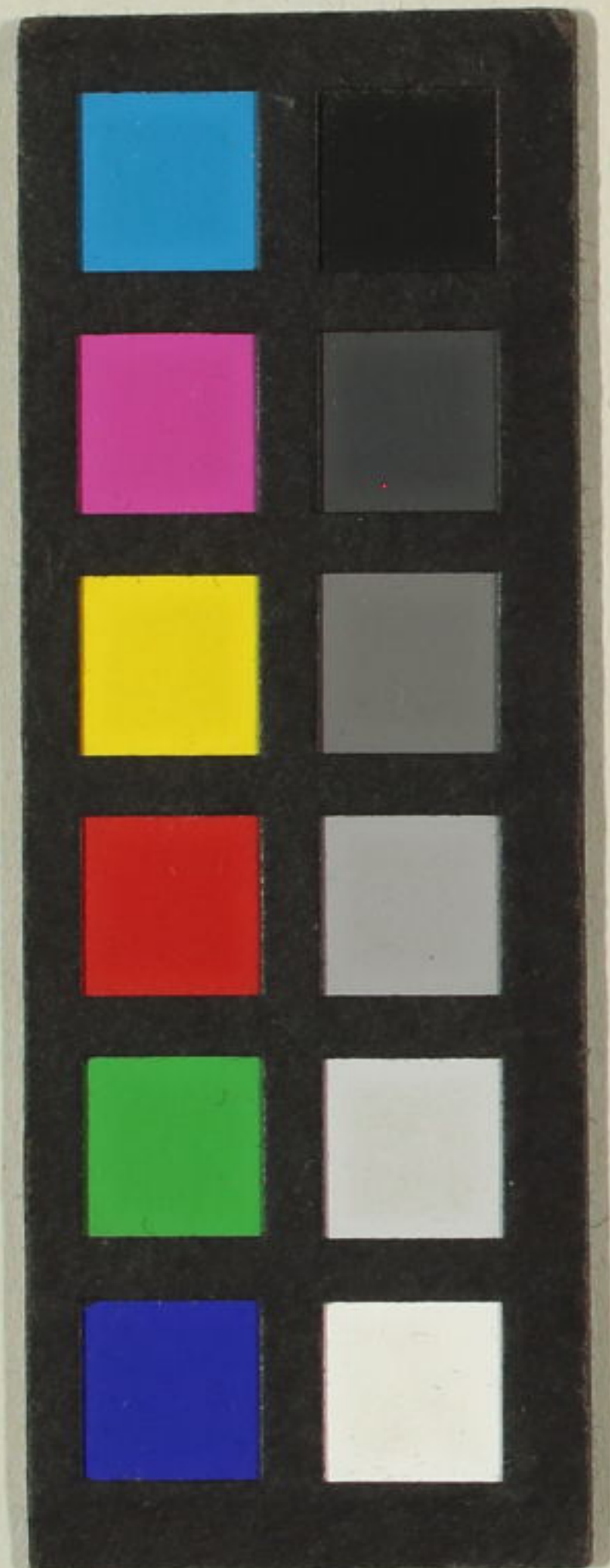
福川や歯車の歌

若き時終るも

まねぬ初音の

壬申新巻

隆風



松英
[Red Seal]



日如くや春よつと月も水も花も
春遊

梅咲く訪くありぬまは家
号裁

掛く居る火桶もさめく物あり月
弘英

去り出た回水もなや夕籠子
為山

常々作し咲くは月と花梅
乙歌

壬申春

松英
[Red Seal]



Handwritten Japanese text in vertical columns, likely a poem or prose.

壬申春

美織新書画



Printed Japanese text in vertical columns, likely a title or publisher information.





うしし人の河や
 園の春 竹山
 村の春 梅山
 月 弘英
 中つるのやうに春や
 梅 寺

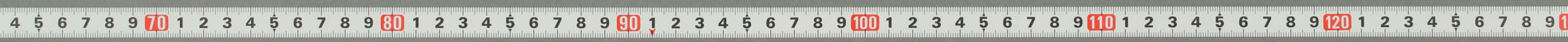
竹山の春をよみて
 梅山の春をよみて
 弘英の春をよみて
 寺の春をよみて

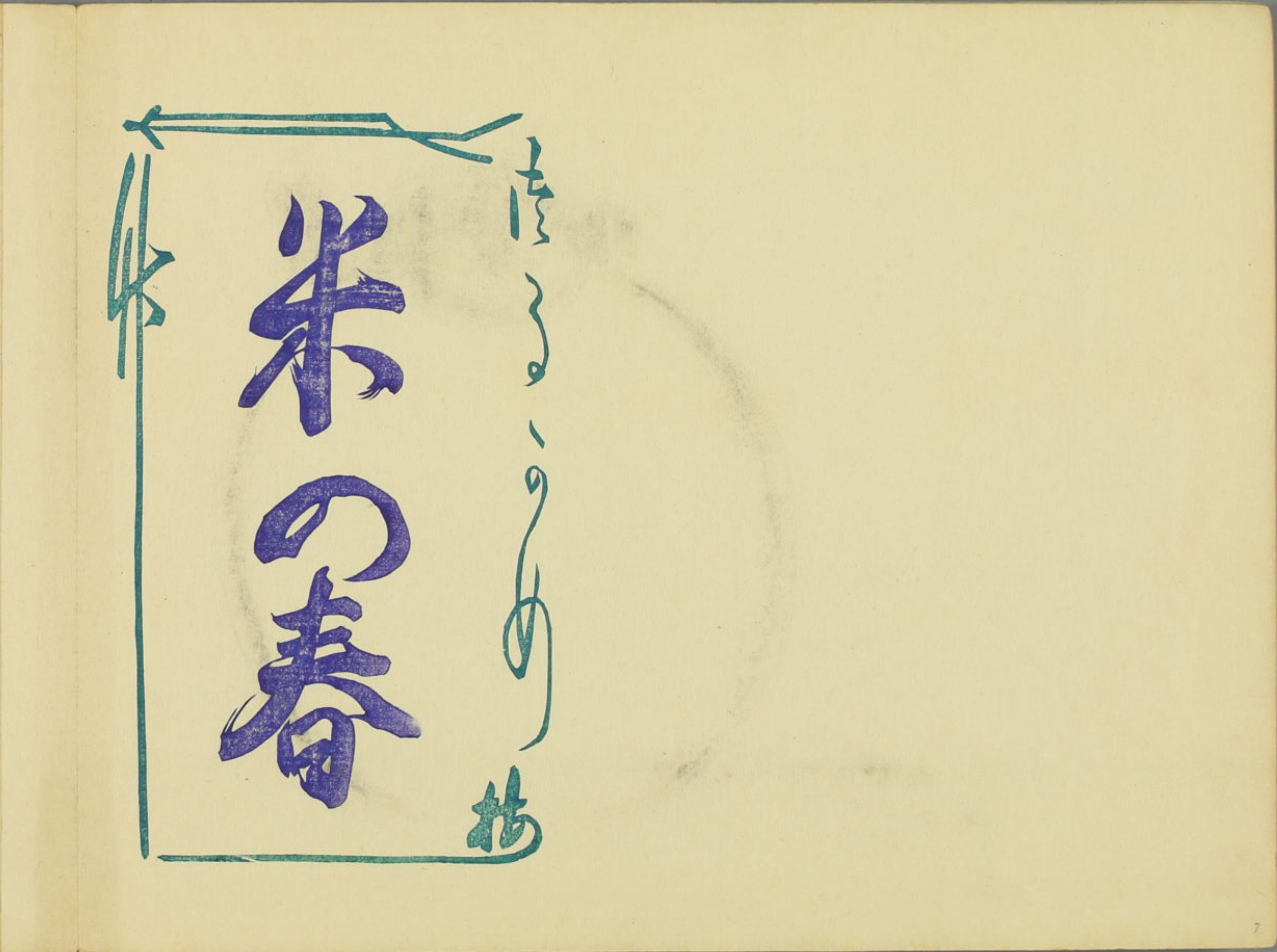
初春の春をよみて
 春の春をよみて
 春の春をよみて
 春の春をよみて

梅山の春をよみて
 竹山の春をよみて
 弘英の春をよみて
 寺の春をよみて
 春の春をよみて
 春の春をよみて
 春の春をよみて
 春の春をよみて

竹山の春をよみて
 梅山の春をよみて
 弘英の春をよみて
 寺の春をよみて
 春の春をよみて
 春の春をよみて
 春の春をよみて
 春の春をよみて

八十の春をよみて
 春の春をよみて
 春の春をよみて
 春の春をよみて





文庫31 B0031 8





蒼蒼や 松の影 白雲の
 松乃 松の影 白雲の
 蒼蒼や 松の影 白雲の

松生 山

松乃 松の影 白雲の
 蒼蒼や 松の影 白雲の
 松乃 松の影 白雲の
 蒼蒼や 松の影 白雲の

松生 山

松乃 松の影 白雲の
 蒼蒼や 松の影 白雲の
 松乃 松の影 白雲の
 蒼蒼や 松の影 白雲の

松生 山

松乃 松の影 白雲の
 蒼蒼や 松の影 白雲の
 松乃 松の影 白雲の
 蒼蒼や 松の影 白雲の

松生 山



3 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4



信
松
印

蓬萊や他はむらじ有海
松乃九のすうりつと入や花界
老松世よりも口は 玉露の如
松
素山

物中存あるははくつやゆつこん
基を以てうきや 掃きの河を馬音
梅屋で掃ふりらぬ 袋のせま
四の掃もまゝのりの白雲や
松乃く 葉まを和 伝右松
雪のまはく 雪や 毎の 雪
掃ひつり ぬいぬい ぬいぬい
篇をつら 雪のうら 松
此のまはく 雪の 掃ふ 松
松乃く 雪の 掃ふ 松

雪の掃のまはく 雪の 掃ふ 松
らぬい 雪の 掃ふ 松
白まはく 雪の 掃ふ 松
雪の 掃ふ 松
松乃く 雪の 掃ふ 松
松乃く 雪の 掃ふ 松

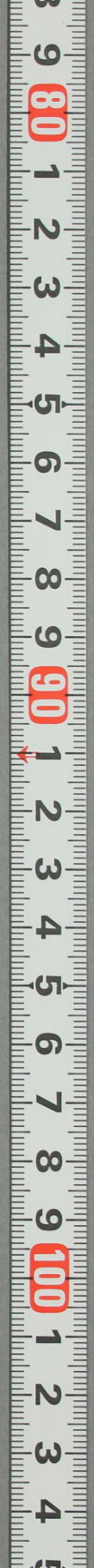
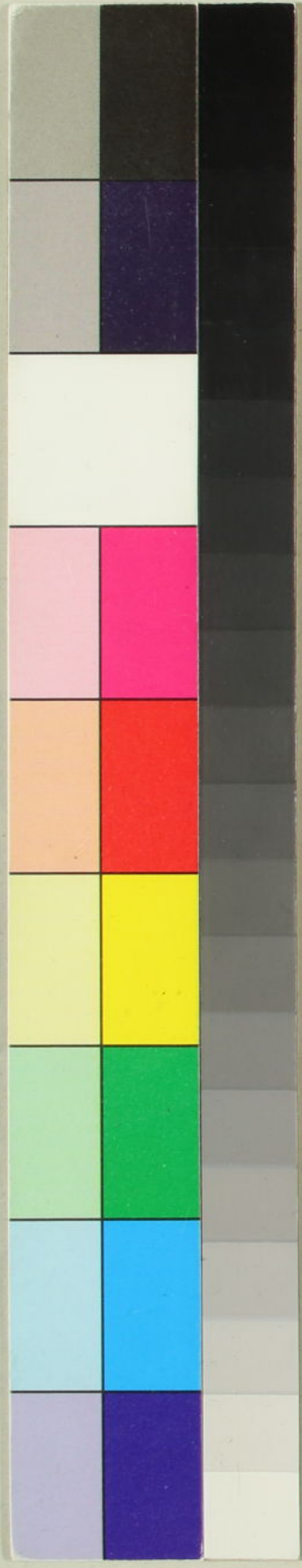
松乃く 雪の 掃ふ 松
壬申 雪の 掃ふ 松
白まはく 雪の 掃ふ 松



初夜やまは海へふきぬ花の
 一はくしゆふ屋づくしは
 本所 陰をけりしとく
 昔や ちかきとちかき
 道草も 根つよく 育
 けり ちかきとちかき
 せん 是の 朝も 夕も
 佛より 神も 天も
 徳も の まを ぬ
 花の 枝
 昔や ちかきとちかき
 花の 枝
 昔や ちかきとちかき
 花の 枝

保 耳 護 三 院 若 砂 飛 深 祖 甲 素 美 有 八
 子 小 介 子 車 民 量 石 寺 風 松 仙 在 終 菓

壬申初夜
 是夜

10
1
2
3
4
5
6
7
8
9
90
1
2
3
4
5
6
7
8
9
100
1
2
3
4
5
6

長庚
眞



苗別

神枝 たるの

あまのいかりけりう神 長庚

長庚 夫人の御意

却し御意に依りて

その香の来りありてをいふ名神 奈
又 表を色くすくちを花のふきうわ
あまのいかりけりう神
花枝の中 又あまのいかりの御意に依りて
あまのいかりけりう神
又 表を色くすくちを花のふきうわ

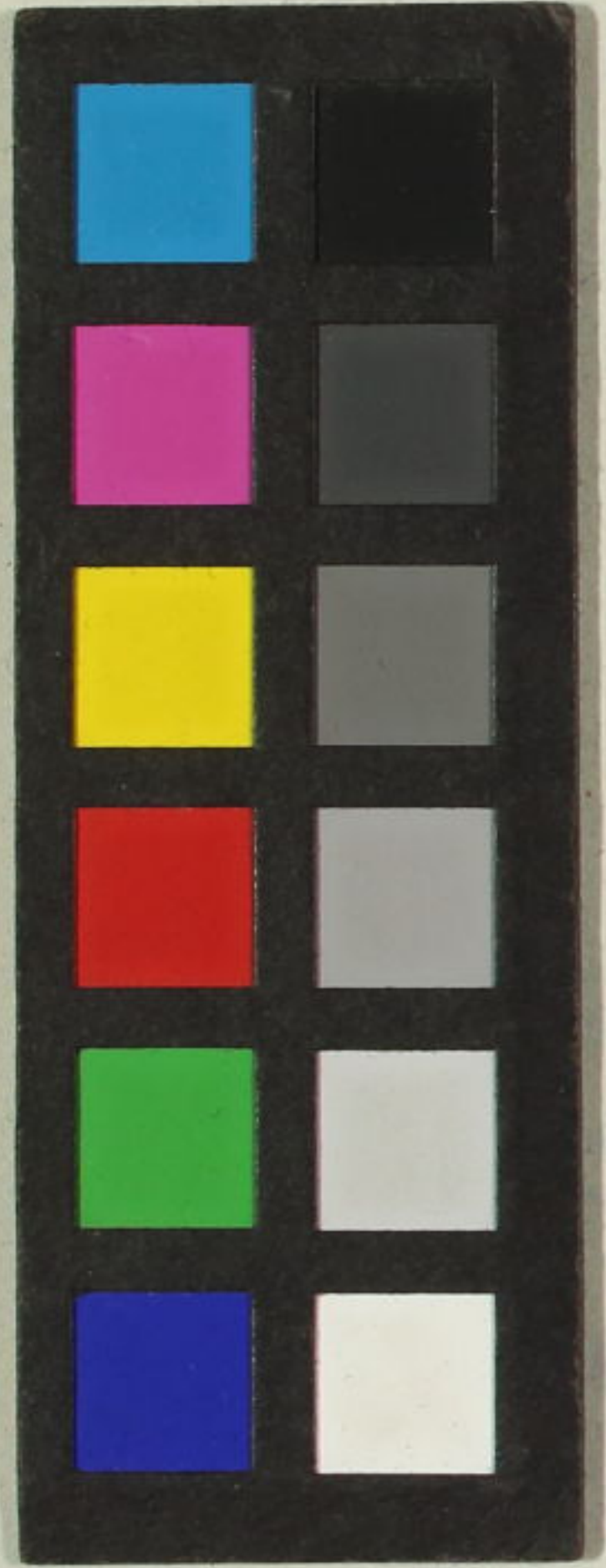
為山 如白 台年 芳泉 逢梅 等裁

あまのいかりけりう神
花枝の中 又あまのいかりの御意に依りて
あまのいかりけりう神
又 表を色くすくちを花のふきうわ

是三 文昇 然亦 ちき丸 一鼎 梅枝 東枝 兼兄 喜次

壬申 長庚

長庚 眞



是
實



初の頃さへも
際の志を
なす
柳の
花の
白

壬申

某

如
白



小西三吉大士

清松 國



新日よき恵

福ハ一也 富奈の歌

昔より此 縁も

よねね 初音の

壬申新巻

隆風





牛村 寫



のひらりたる夕まゝありき
すめて春風よもよもいかに
あつたや世をりれい海砂
町並のあやもりの二ヶ
つねのくちや中つたあ
一晩のくちまひひくちまひ

人きぬきを懐のたし
あつたや世をりれい海砂
町並のあやもりの二ヶ
つねのくちや中つたあ
一晩のくちまひひくちまひ

春のやもよもいかに
あつたや世をりれい海砂
町並のあやもりの二ヶ
つねのくちや中つたあ
一晩のくちまひひくちまひ

申す
申す

大
山
石
西
古

一
二
江
方
初
可
二
初
府

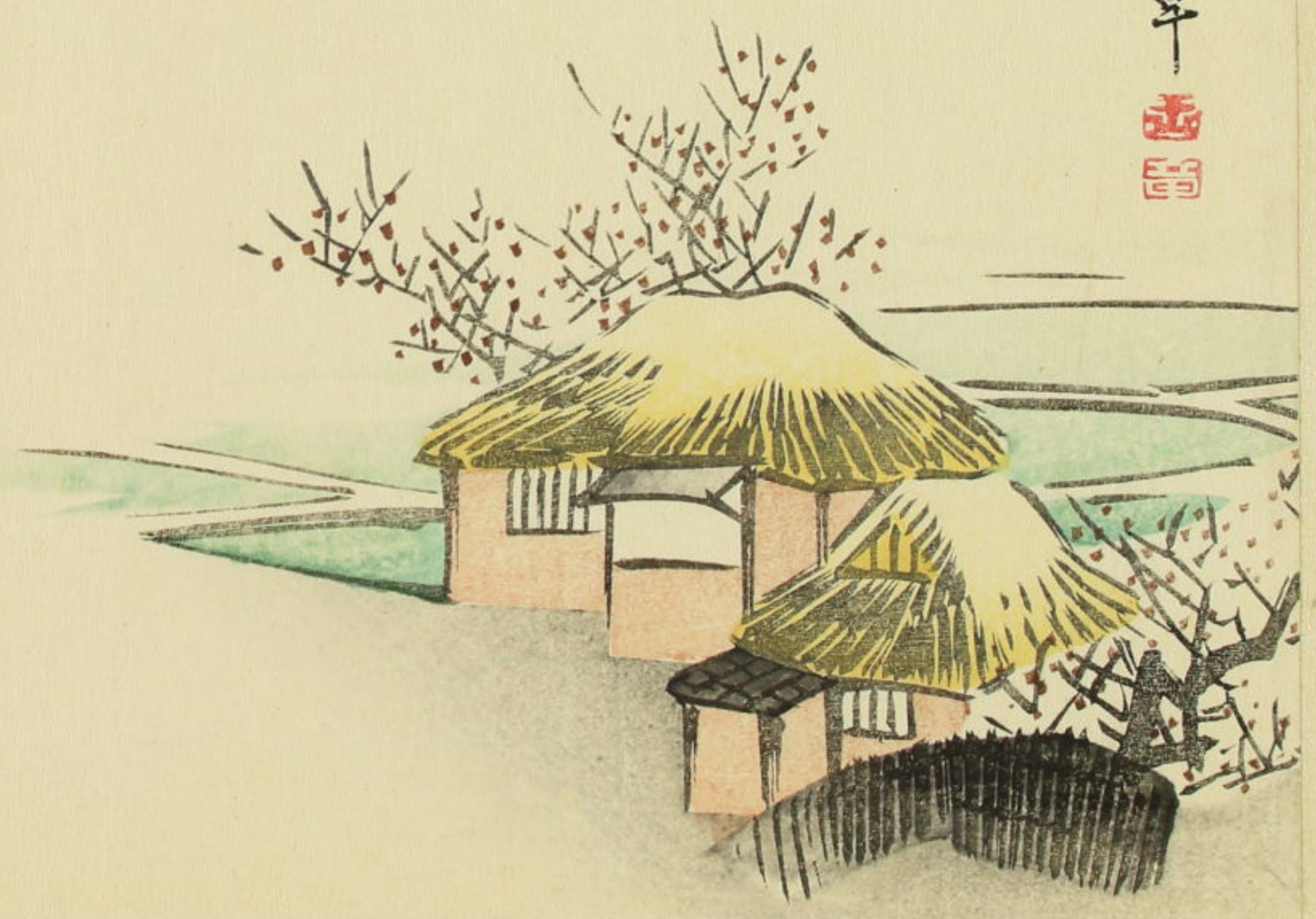
一
二
江
方
初
可
二
初
府

申す
申す



9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5

五三草 画



雪一羽まき

豆木の

うさぎの中

紫白

一得 逸楽 鱗星 逸遊 如絃 花月 一房 一径
 多く居るもまきの用や来ふまき
 えりや世はらられまきくえ
 月影のまきまきまきはまきまき
 意乃くまれまきまきまきまき
 えりやまのふくまきまきまき
 花喜みまきまきまきまき
 花女やむくまきまきの舞まき
 子のまきまきまきまき
 夢みまきまきまきまき

壬申年

和冠山旭社



寺園石より伝へり一紐菊の御徳
 昔の妙法蓮華宗の住持の法華堂
 清く静くとも同じく大石の石
 ころ—あま—まがら—まがら—
 ねんねとて—こころを—ま—ま—

久—く—く—く—く—く—く—く—
 庭 晴—は—は—は—は—は—は—は—

松隣

好—の—の—の—の—の—の—の—
 好—の—の—の—の—の—の—の—

梅共

多—の—の—の—の—の—の—の—
 多—の—の—の—の—の—の—の—

稻處

草—の—の—の—の—の—の—の—
 草—の—の—の—の—の—の—の—

草居

人—の—の—の—の—の—の—の—
 人—の—の—の—の—の—の—の—

露丸

雨—の—の—の—の—の—の—の—
 雨—の—の—の—の—の—の—の—

流美

任—の—の—の—の—の—の—の—
 任—の—の—の—の—の—の—の—

為山

水—の—の—の—の—の—の—の—
 水—の—の—の—の—の—の—の—

春園

堂—の—の—の—の—の—の—の—
 堂—の—の—の—の—の—の—の—

梅裡

人—の—の—の—の—の—の—の—
 人—の—の—の—の—の—の—の—

蓬宇

家—の—の—の—の—の—の—の—
 家—の—の—の—の—の—の—の—

黙池

新—の—の—の—の—の—の—の—
 新—の—の—の—の—の—の—の—

漱水

月—の—の—の—の—の—の—の—
 月—の—の—の—の—の—の—の—

菟堂

名—の—の—の—の—の—の—の—
 名—の—の—の—の—の—の—の—

名九

可—の—の—の—の—の—の—の—
 可—の—の—の—の—の—の—の—

可兆

草—の—の—の—の—の—の—の—
 草—の—の—の—の—の—の—の—

草居

呼—の—の—の—の—の—の—の—
 呼—の—の—の—の—の—の—の—

吾柳

松—の—の—の—の—の—の—の—
 松—の—の—の—の—の—の—の—

松泉

杜—の—の—の—の—の—の—の—
 杜—の—の—の—の—の—の—の—

杜清

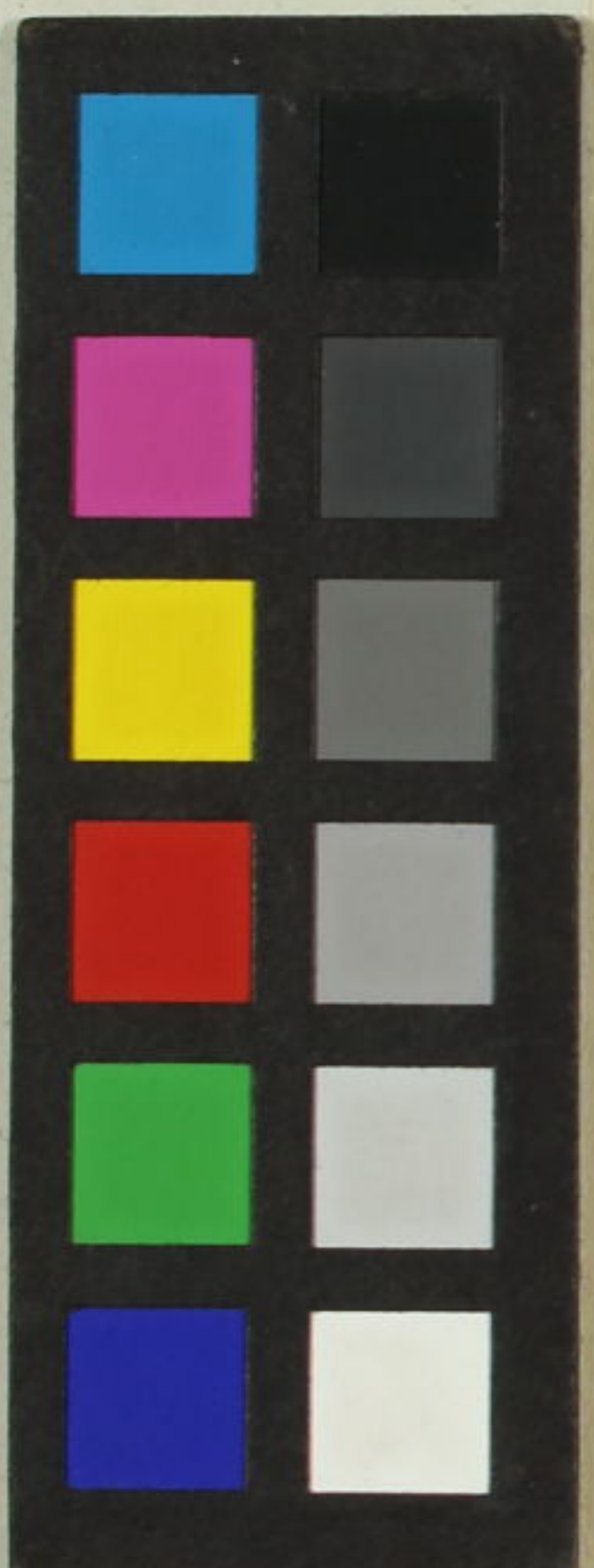
稲—の—の—の—の—の—の—の—
 稲—の—の—の—の—の—の—の—

稻處



此の書は、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

壬申
二
柳



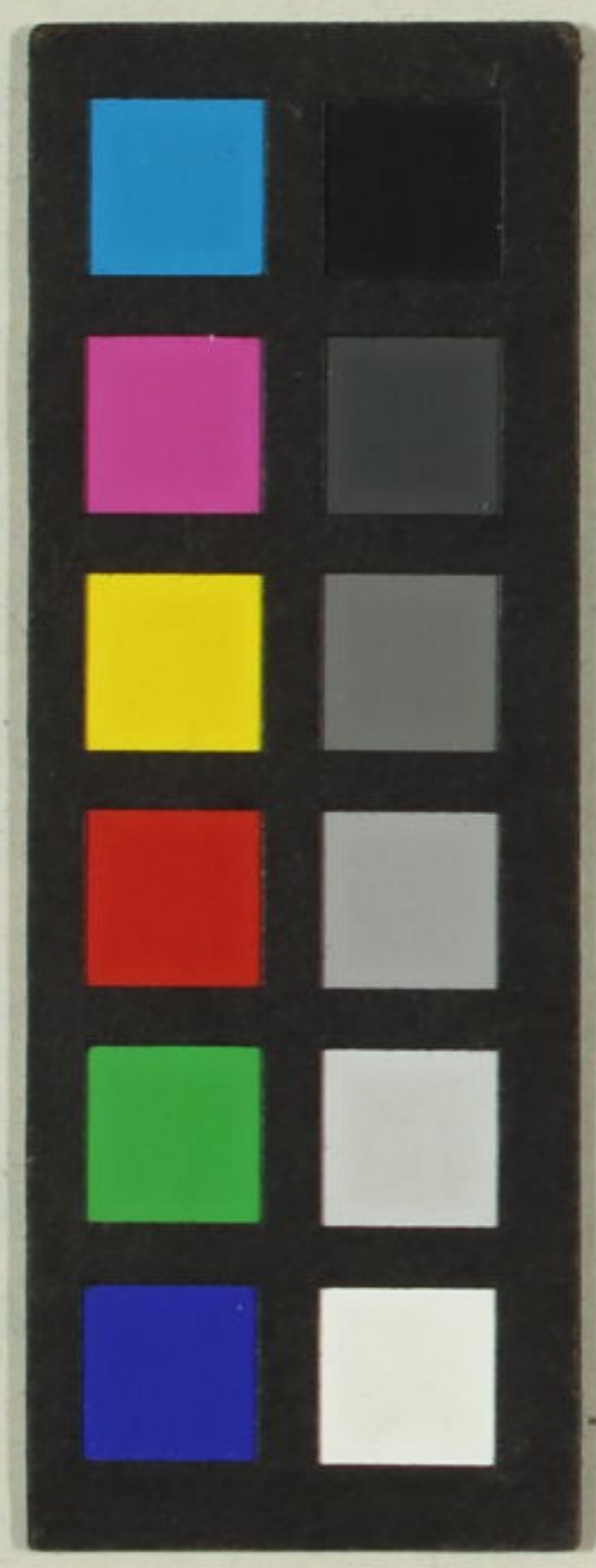


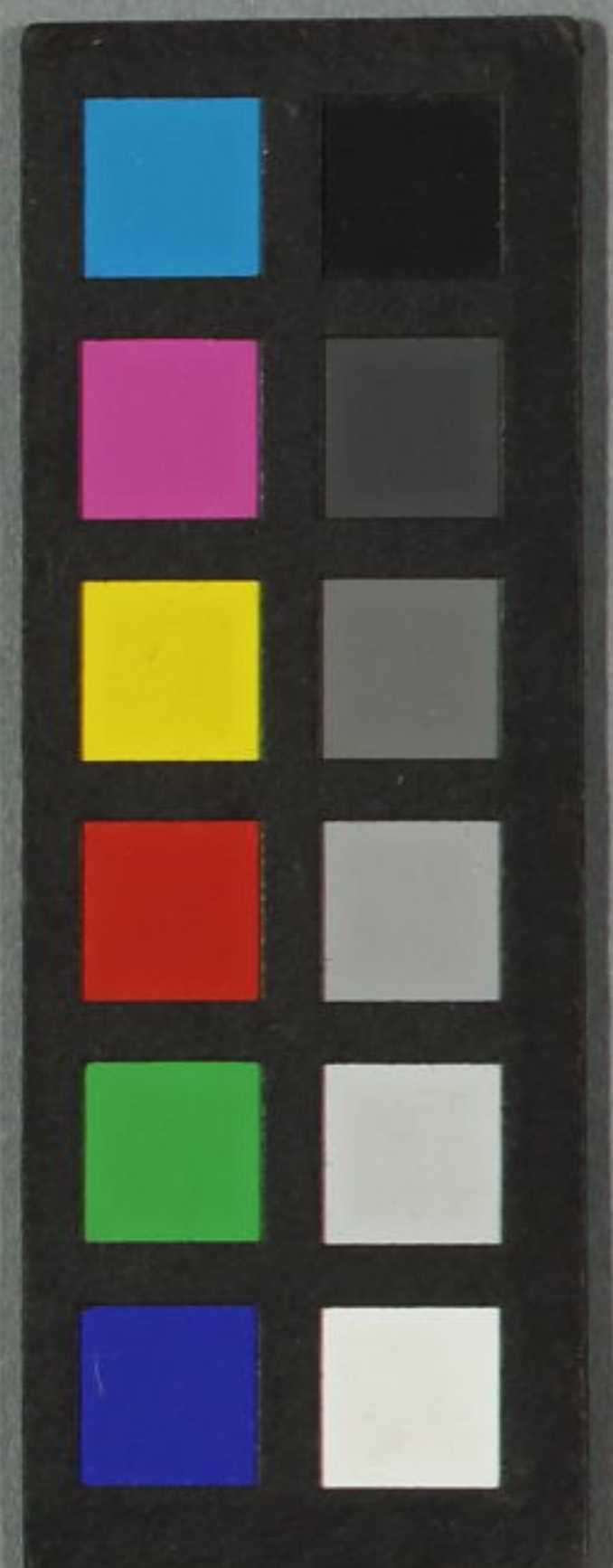
妻ととも甲の隣りの
夕日と紅

あのかのあつち
あし雲の門

年月をさし
尾の火吹舟

宇野佳





物部之居成跡也

物部之居成跡也
物部之居成跡也
物部之居成跡也



Main body of handwritten Japanese text in cursive style, arranged in vertical columns across the page.

A horizontal line of smaller characters, likely a signature or a list of names, located below the main text.





上南渡

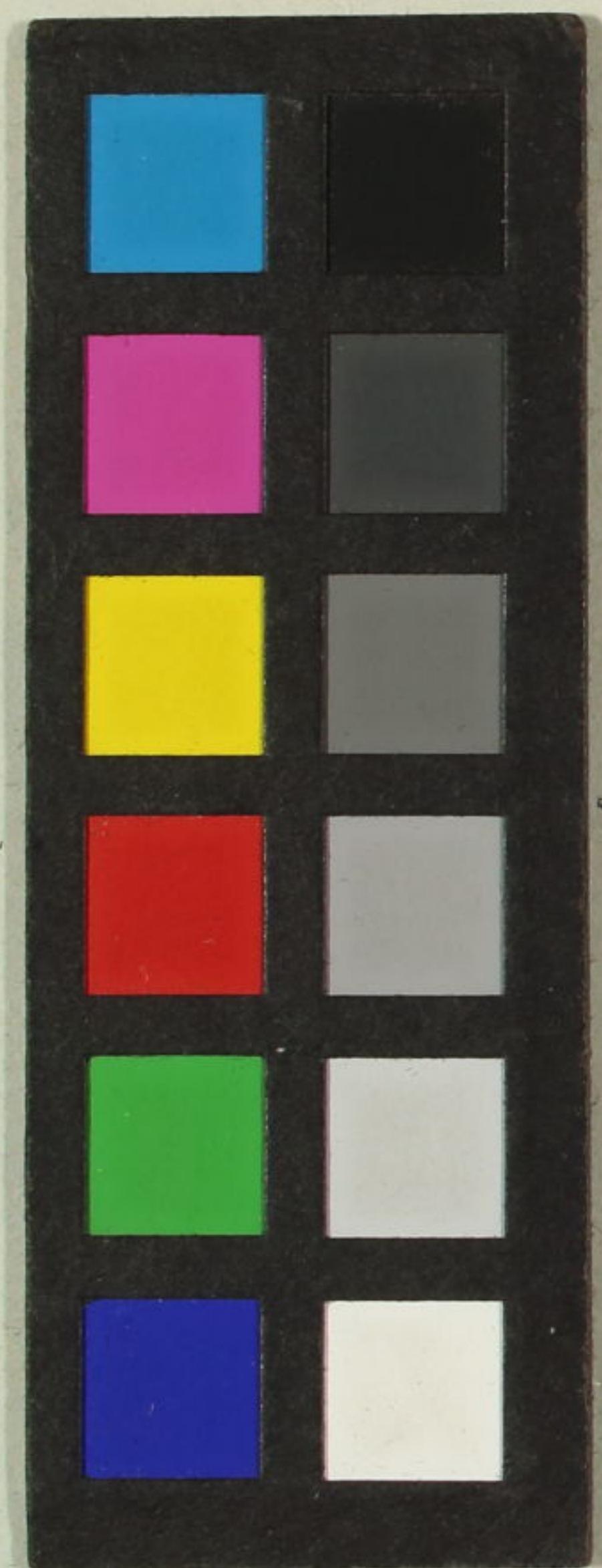


... (transcription of the main text) ...

中世長
吳鎮軒書

文庫31 B0031 30

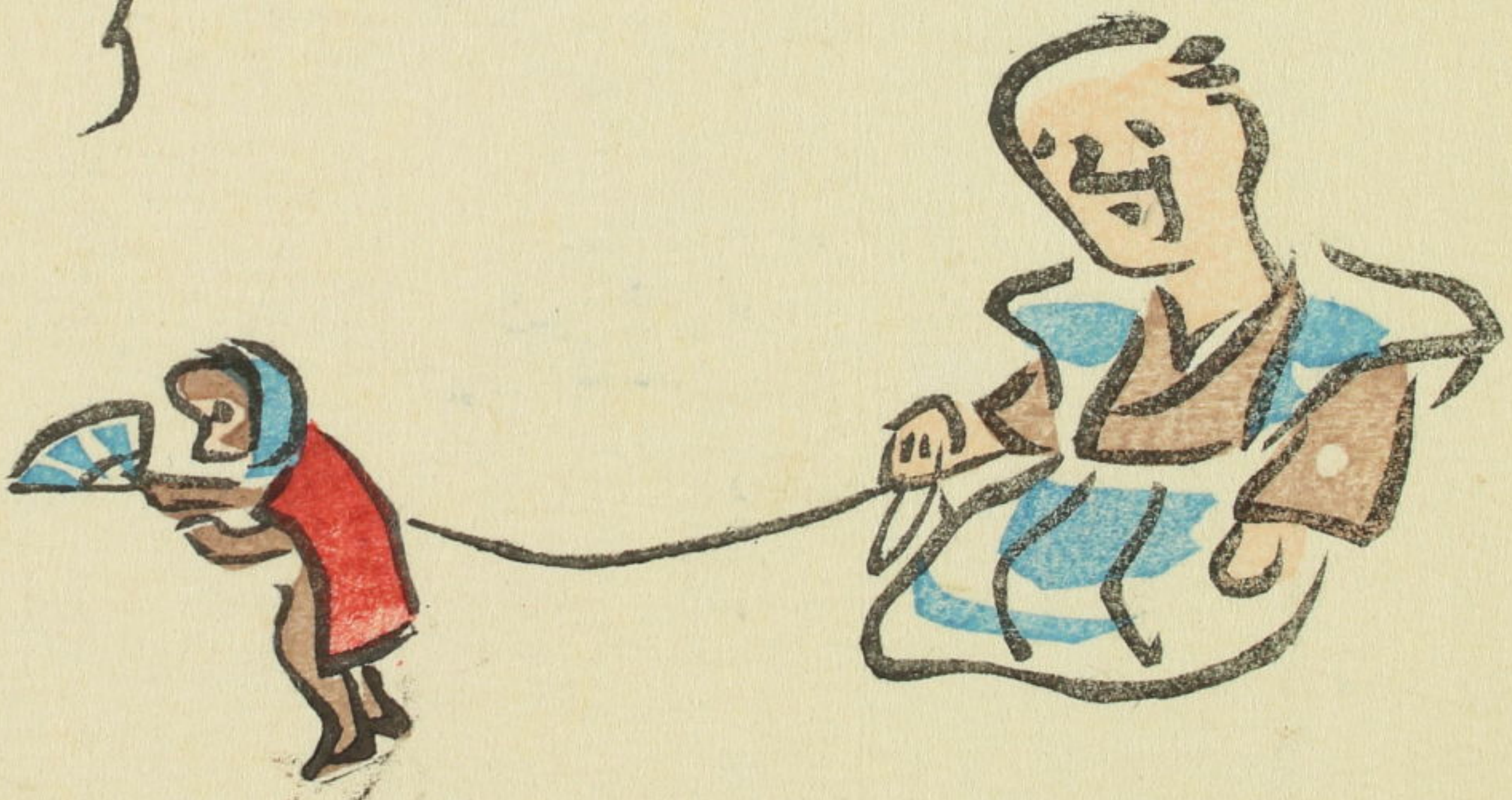




五重

門
居
の
後

ひまりの
あまのこ
神
其
残



明治五年壬申秋七月十二日卒

古翁淨觀居士 行年八十六歲

辭世

疾起てこれハ

此山ト

秋の色

吉谷

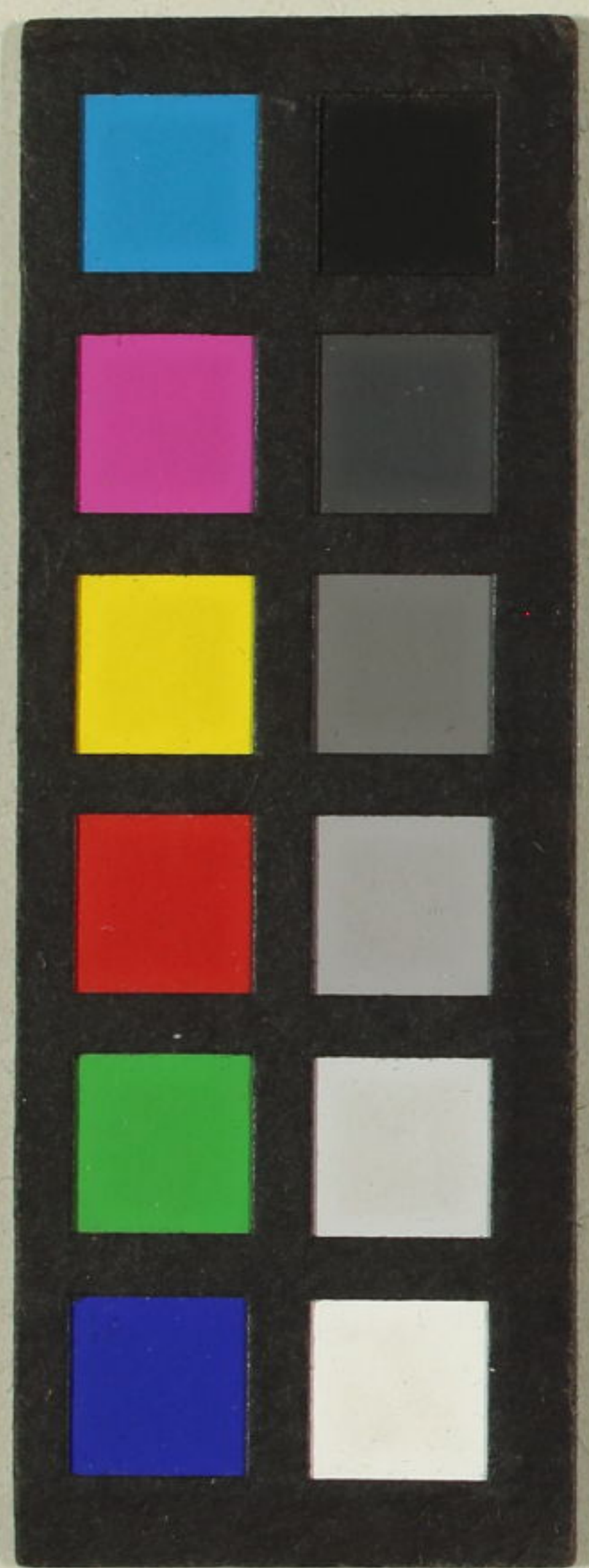
慈父子とこれ乃とて

ひやまのり

おちあやちり柳

少梅





明治五年壬申秋七月十二日卒

古翁淨觀居士 行年八十六歲



辞世

疾起てこれハ

秋の山

秋の色

吉谷

慈父よりこれ乃るとき

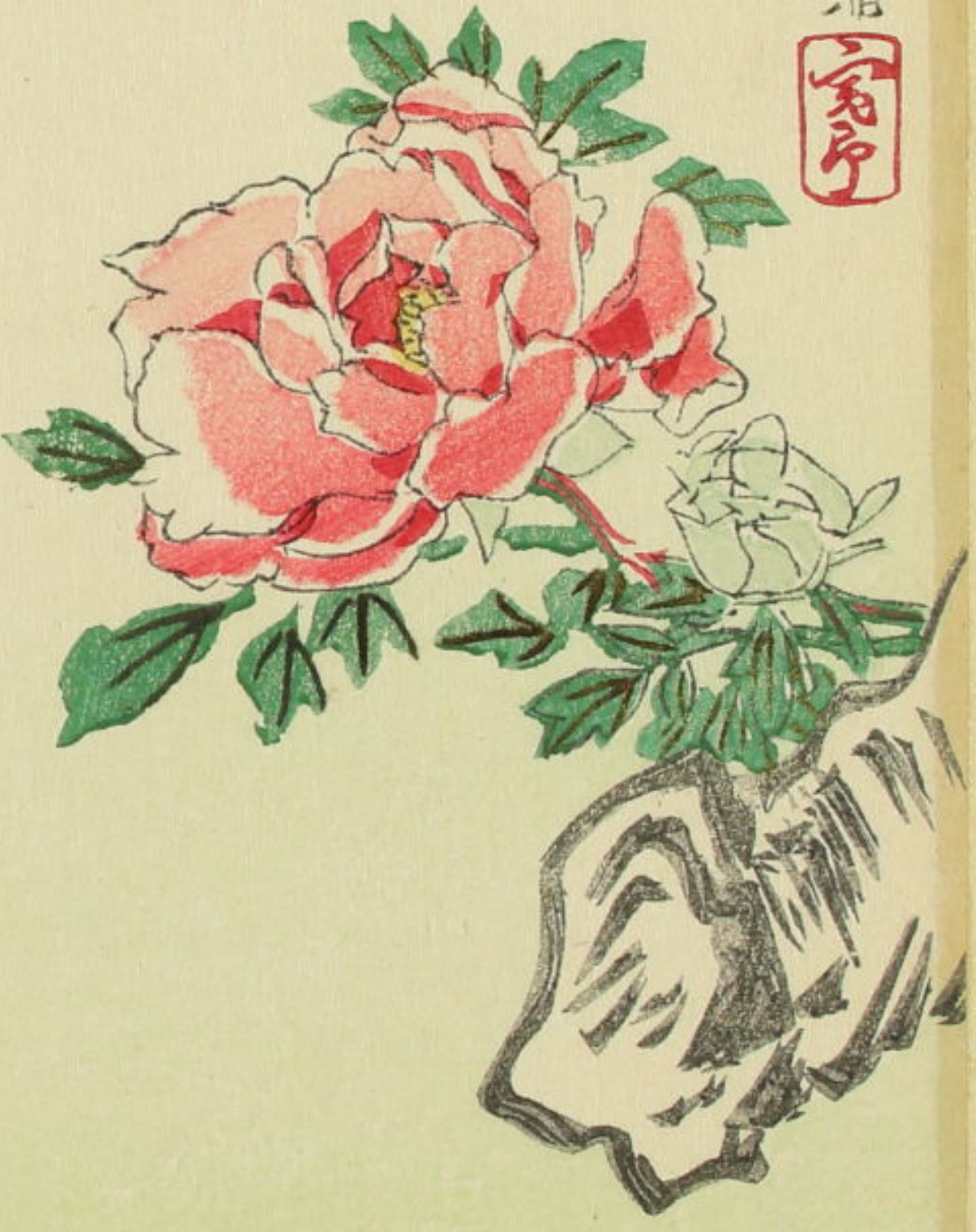
ひやまのひま

お花もあやう柳

少梅

1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7

翠湖窟 



田の鶴乃首をけり又ては川に
新しきとよきまはるや初より
羽子もや実をいつくはひと笑ひ
故きらひ此病の故きう残煙のう
茶臼 酔て喰ふも妙、味のう
茶臼 搦るおよゆりや木の芽吹
とらふく見ても表をを敷のう免
馬市此清く何とて青あはし

一窓
一
半水
登月
魚一
松鶴
田花
石眠


海棠の足あらも蒼くく
一掃 委のなまへ 嬉しき香は
多竹や保長うらの女つぎ
門川へ馬退きむやぬり月
元日や家路ふくふあひあらけ
豆風多に正月乞ふはふふ

椽友
一口
清軒
上茶
其山

本まきり老なり身もうらゐのそら
見外

竹了くも憂りむすもけ子
養生にひと廻り見る牡丹赤
松旂
梅進

壬申初夏

善心出 



是
真

昔々の月の光の影の
さびしき池のほとり
五生 以 興 守

月夜や池のほとり
池のほとり
葵史

雲の影のまはりの月影
影のまはりの月影
芳泉

月夜や池のほとり
池のほとり
ちき丸


池のほとり
池のほとり
藤平

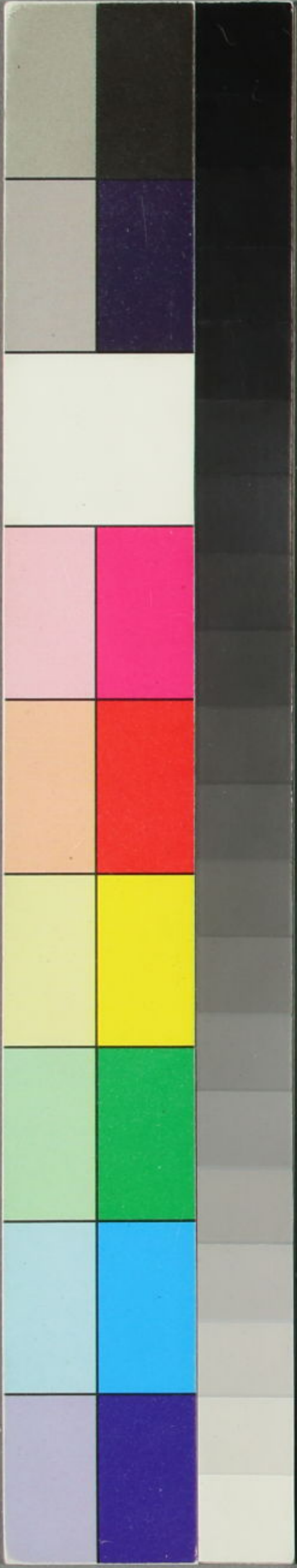
池のほとり
池のほとり
晚云

池のほとり
池のほとり
梅枝

池のほとり
池のほとり
星三

池のほとり
池のほとり
喜徳

壬申の秋 喜徳






大福りしむや藤をわき合
 橋の跡も物も新とくもらん
 月のおはよりしむ村は
 生鶏もよ新末のま
 掃よせし遊もよん
 碓氷川
 形風俗の良りのまぬ
 洗ひ
 秋田をよるまぬか
 多
 古一頌

淡 藤
 百 可
 碓 氷
 秋 田
 松 南
 湖 風
 美 海
 百 下
 松 南
 碓 氷
 廣 池
 碓 氷
 九 岳
 牛 籠
 淡 藤

壬申書

黄裳老耕静写



いあいたの香も
中もあつ山雲も

さうち

さうちさうち

いさうち梅のさうち

さうち

いさうち梅のさうち

いさうち梅のさうち

さうち

いさうち梅のさうち

いさうち梅のさうち

さうち

いさうち梅のさうち

いさうち梅のさうち

耕翁

いさうち梅のさうち

全切

いさうち梅のさうち

五分

いさうち梅のさうち

松竹

